

2) キンギョソウ=金魚草

キンギョソウはゴマノハグサ科の多年草である。原産地はヨーロッパの地中海沿岸で、主に鑑賞用として植えられ、最近では切り花としての人気も高い。日本に渡来したのは江戸時代の天保年間で、1830~1840年頃と思われる。地中海沿岸からヨーロッパに伝わったのは1580年頃のこと、以来イギリスを中心に改良が加えられて、日本で現在栽培されているものは、明治以降に輸入されたものである。和名の由来は花の形が金魚が口を開けている姿に似ていることから名付けられた。学名は『*Antirrhinum majus*』で、属名は「鼻に似ている」、種小辞は「巨大な」という意味である。イギリスでは『snap dragon』、「噛みつき龍」といわれており、日本の金魚をそのまま龍に見立てたものである。このキンギョソウは草丈によっていくつかに分類され、高さ1m程のものは切り花用として栽培されている。また草丈が50~80cmほどの中高性種には、コロネット種やマダムバタフライ種などがあり、前者は花穂が長くまた風にも強い利点があり、後者は八重咲で切り花や鑑賞用として花壇などに植えられている。この他にも矮性種で、草丈がせいぜい30cm程度にしかならないフローラルカーペット種や、リトルダーリン種などがある。矮性種はどれも鉢植えやプランター植え、花壇などに適しており、花屋さんでもよく売られている。

この花の良いところは何といても花色の豊富なところであろう。一口に赤といても黒赤から朱赤までその色調は限らないが、キンギョソウはその全てを満たしてくれる。それに種子が自然にこぼれて、一度植えておくと庭のどこかで翌年も花を咲かせてくれる。そしてまったくといっていいほど手がかからない。繁殖は播種が一番よく、路地で栽培する場合は秋に種子を撒き床に撒くのがよい。しかし種子はすこぶる小さいので、水やりの度にどこかに流れてしまうので注意が必要である。この場合、用土は雑菌の少ない鹿沼土の目の細かい篩で振ったものや、桐生砂、山砂などの無機質のものが良い。幼苗のうちは腐敗菌などに侵されやすいからである。発芽後は5~6cm間隔に植え広げて仮植しておく。播種しただけではなかなかうまい具合の間隔で発芽してくれない。無理をして植え広げず、春になってから一群れずつポットに植えるのも一つの方法である。矮性種は春先、花屋さんの店先で小さなポットに入って花をつけたものが、どの色も100円前後で売られている。最初からどんな花が咲くか分かっている分、このほうが面倒はないだろう。また春先に新芽の部分にアブラムシがよく着くので、マラソン剤などを定期的に散布するように心掛けたい。再三述べているようにアブラムシは牛乳でも退治できるので、霧吹きで牛乳を散布するのも一つの方法だろう。5月頃から咲き始めた花は、秋口まで咲き続け、その頃になると、種子がこぼれてどこかに翌年の苗が生長しているという、なんとも効率の良い一年草である。肥料は花が年中咲いているので多めがよく、油粕をメインに化成肥料を時々与えるとよい。



パステルカラーが美しいキングソウの花。どんな色もそろっている感がある。



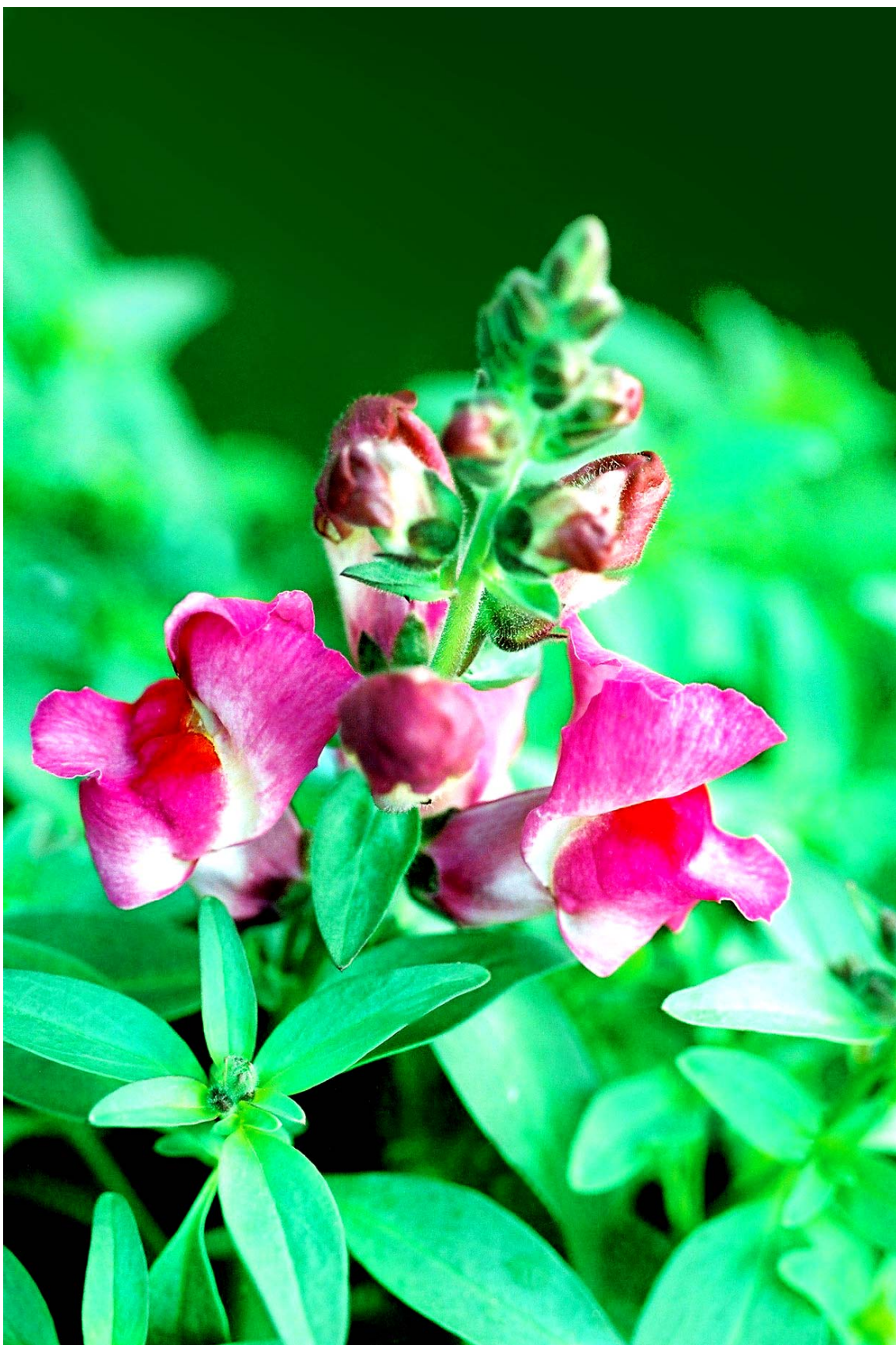
キングヨソウ、イギリスでは『金魚』ではなく『龍』である。



キンギョソウは切花にしても長持ちするために、経済栽培も盛んに行われている。



下段から咲き始まる花は、全部咲き終わるまでに、冬期なら1ヶ月ぐらいかかる。



栽培農家は主にお正月用、お彼岸用として栽培日程を合わせている。



キンギョソウは水揚げはいいのだが、水を切らすとクビがうなだれてしまう。一旦うなだれると、水をあげても元へは戻らず、くの字に曲がってしまう欠点がある。



キンギョソウはブルー系統の色は除いて、ほとんどの暖色系色がそろっている。

[目次に戻る](#)